

KOUNACHIR

a film by Vladimir Kozlov



Auteur-réalisateur : Vladimir Kozlov - Image : Gleb Teleshov - Son : Anton Shepshelovich - Montage : Fabien Daguerre et Nicolas Peltier - Mixage : Clément Gallice - Étalonnage : Jean-Christophe Ané -
Producteur et Distributeur : David Foucher - Graphisme : Lucie Clayssen - Avec la participation du CNC et de ViaVosges, avec le soutien des régions Nouvelle-Aquitaine et Occitanie Pyrénées-Méditerranée,
en partenariat avec le CNC, la PROCIREP-Société des Producteurs et l'ANGOA. Ce film a bénéficié du Fonds d'aide à l'innovation audiovisuelle du CNC. Œuvre développée avec le soutien de Pictanovo

私たちの知らない北方領土の現実

現在はロシアが実効支配する北方領土の国後島。日本が返還を要求しているため、折に触れて話題にのぼるが、島の実態はあまり知られていない。我々が知らなかった国後島の現実が、この映画で初めて明らかにされる。北海道からわずか16キロに位置し、かつては四島全体で約17,000人の日本人が生活していたという北方領土。しかし、戦後の1947年から48年にかけて強制退去が行われ、今日本人は一人もおらず、日本政府は問題が解決するまで、日本国民に入域を行わないよう要請している。本作では国後島の厳しい現状やロシア人住民らの生活の様子が取められ、政治に翻弄されてきた島民の暮らしや日本人が残した遺産を追っていく。そして日本とロシアの間の領土問題に対する住民らの複雑な思いにも迫っている。旧ソ連（現ベラルーシ）出身で、現在はフランスを拠点とするウラジーミル・コズロフ監督が、戦後76年を経た現在の島民の暮らしと彼らの意外な本音を描く。

国際映画祭で上映され話題騒然

日本とロシアの間で長年抱えている領土問題を、市民の視点で描いた映画ということで、ヨーロッパ各地で開かれたドキュメンタリー映画祭で軒並み高い評価を得ている。フランスの「Traces de Vieドキュメンタリー映画祭2010年」にてグランプリ獲得、「American-Russian Independent Documentary Film Festival in New York」にて最優秀撮影賞を受賞。モダンタイムズ紙は「ウラジーミル・コズロフ監督が描く本作は、世界大戦の勝者の苦しい生活を映し出している。ロシア人は現在、停滞している島に住み、幻滅した生活を送っている。軍勢力と栄光を主張する公式的なロシアの物語とは対照的だ」と評している。また、2021年にはモスクワで開催された「Artdocfest」映画祭でも本作が上映され話題となった。

日本が抱える領土問題

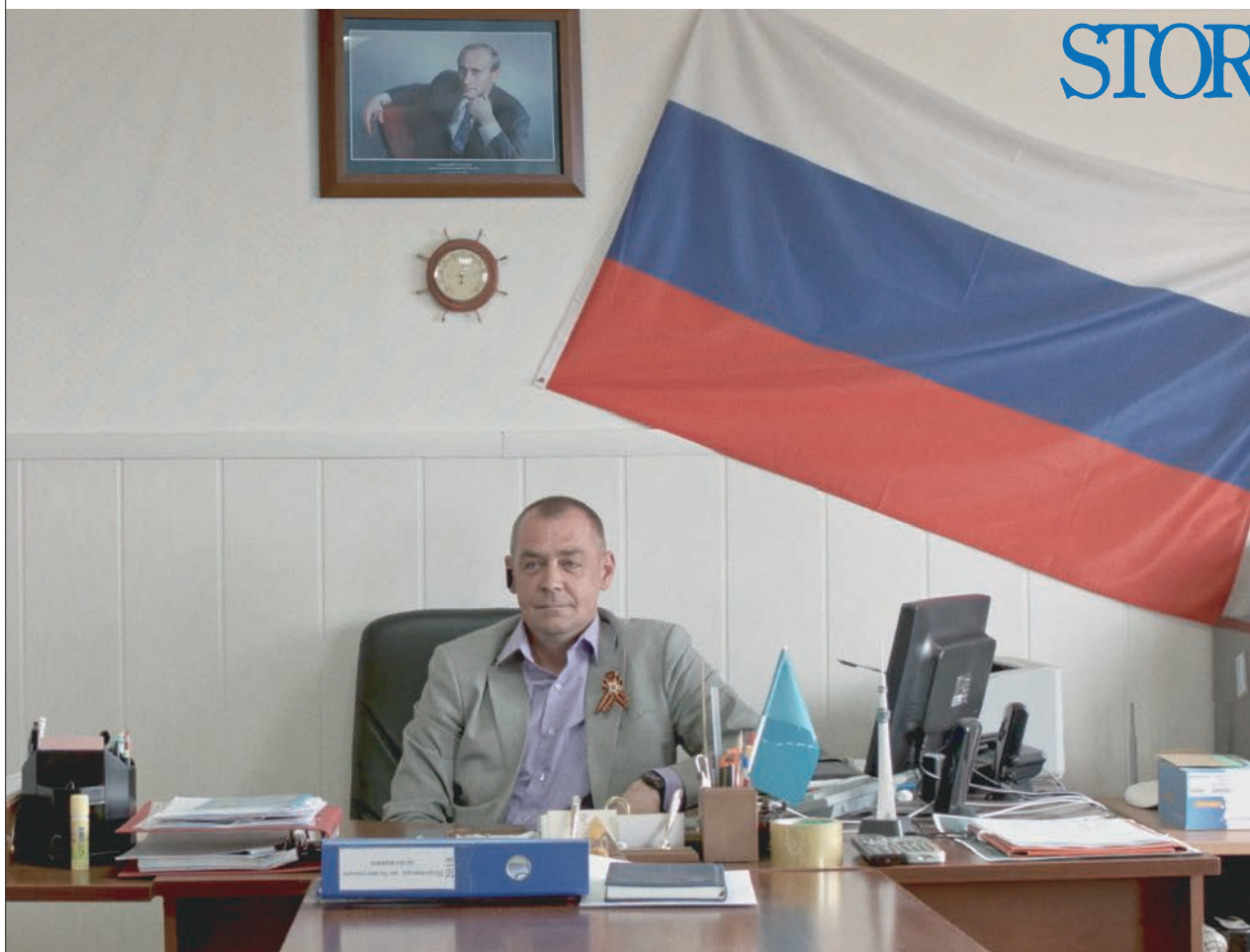
戦後、日本は一貫して北方領土の返還を要求してきた。領土に関しても定めたサンフランシスコ平和条約で、日本の千島列島、南樺太の権利、権限及び請求権の放棄が記された。この時、ソ連はこの条約には調印していない。両国間の平和条約はこれまで署名されておらず、現在も北方領土問題の解決に向けた話し合いが続けられている。

客観的な視点に立った映画

監督は旧ソヴィエト連邦で現ベラルーシ、ミンスク生まれのウラジーミル・コズロフ。現在はフランスを拠点として、長年、ロシアやフランスの題材をもとにドキュメンタリーを制作し続けている映像作家だ。今回、ロシア連邦保安庁、かつてのKGBの許可と国境警察の通行許可証を申請してようやく撮影の機会を得ることが出来たという。ロシア側の主張に偏ることなく、島に暮らす人々の証言や生活の実態を映した本作からは、本当に解決すべき問題や住民たちの真の願いが見えてくるだろう。

INTRODUCTION





旧ソ連出身フランス在住の監督が映し出した、国後島の《真実》とは 第二次世界大戦から76年、北海道からわずか16キロの近くて遠い島

島に暮らす男性が、国後島に点在する日本人が暮らしていた痕跡を紹介していく。寺の石垣、朽ち果てた船や砲台など、島のいたるところに第二次世界大戦の痕跡がある。さらに、シャベルで土から掘り起こされたのは日本人が使っていたであろう醤油ビンや、欠けた茶碗だ。

軍関係に従事する男性は、第二次世界大戦中の1943年に製造されたという軽機関銃や弾薬を見せてくれた。そして、島民がソ連軍と日本兵に扮し、旧ソ連軍が国後島に上陸する様子をイメージした映像も見せてくれる。
「我々はソ連軍司令部の代表だ。日本軍駐屯部隊に無条件降伏を要求する…」

ある高齢の男性は静かに語り出した。
「1946年から49年の話をしよう。私たちが子どもの頃は日本人とも仲がよく、一緒になってよく遊んでいた。ロシア人は日本人から漁の技術を学んだんだ。ここは自然や温泉などの観光資源もあるが、現実には大砲と戦車、そしてごみ溜めがあるだけだ」と嘆く。

また、別の男性は国際経済フォーラムで安倍首相とプーチン大統領の首脳会談の開催を前にして語る。「一般庶民は日本との条約締結を望んでいる。雇用を生まなければ住民は酒におぼれて死ぬか、去っていくだろう」

農業を営む別の女性は語る。「日本人がいなくてもここで暮らせる。日本人は私たちに島を返還しろと言うけれど移り住むつもりはない。彼らは漁業をするためにこの海域が欲しいだけなのよ」

一方、ある企業経営者は全く別の考えを持つ。
「第二次世界大戦の結果の再検討はしない。島を返還する理由などどこにもない」

一人ひとりがそれぞれの立場でこの島の在り方を語るのだった。



director's profile

監督：ウラジーミル・コズロフ Vladimir Kozlov

フランスで活動する映画監督、脚本家。1956年6月7日、ソヴィエト連邦（現ベラルーシ）のミンスク生まれ。ミンスク国立大学で歴史と社会科学の学位を取得してから、VGIK（モスクワ国立映画大学）に進んで助監督の資格を得る。ベラルスフィルムやモスフィルムなどのスタジオで、助監督として13年間に20本ほどの長編劇映画制作に携わる。そのなかには1985年のモスクワ国際映画祭でグランプリに選出されたエレム・クリモフ監督の『炎628』もある。1992年、フランスに移住し、オクシタニー民衆劇場で舞台監督、俳優として活動。2002年『Musique et Couleurs du père Léonide』でドキュメンタリー映画の作家、監督として活動を始める。SCAM（マルチメディア作家の民事組合）会員。国際映画祭の審査員も務めている。



DIRECTOR

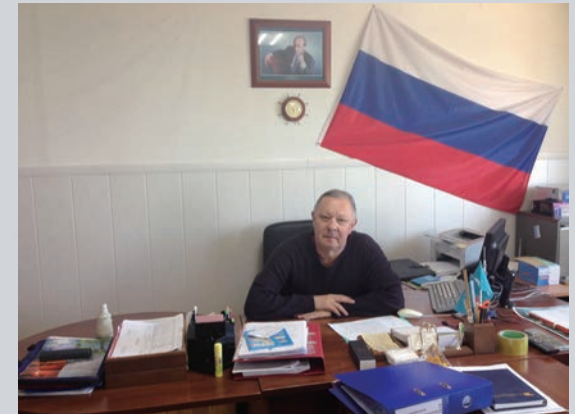
director's note

ある日、私の友人である詩人・エッセイストのミハイル・ヴォロディヌから、クナシリについての話を聞いた。私は彼が持つ写真と記憶を通して見えてきたものに心を動かされた。それは、私が今日のロシアについて語りたいと思っていたこと、つまりその複雑さと矛盾、とりわけ国境に関する問題、外交、栄華の夢、ソ連崩壊後の不条理などにも重なった。そこで、私はクナシリへ向けて出発した。そこにたどり着くのは簡単ではない。フランスを出てから4回飛行機を乗り換え、オホーツク海を2日間、航海しなければならないのだ。そのうえ、FSB（＝ロシア連邦保安庁、元KGB）の特別許可と、国境警備隊の通行許可証がなければ立ち入れない国境地帯にあるのである。

撮影中に、クナシリでの先の世界大戦の存在を確認した。錆びた装甲車の残骸と、草に覆われた戦車が島中に点在しているのだ。その一方で、1947年の日本人の強制退去の痕跡は何もない。

ここに住むロシア人たちは、まるでソヴィエト連邦の生き残りのようである。その共同体の中で私は、ベケットの戯曲「ゴドーを待ちながら」の世界に入り込んだように感じた。

この場所を映画に撮ることは決して無意味ではない。住民は島の1500平方kmあまりの土地を分け合い、そこでは全員が知り合いだ。この小さい世界の人々を捉えることで、ロシアの社会全体の問題をも表すことができるのだ。



director's interview

—— 一般のロシア人は、この北方領土問題についてどのような考え方を持っているのでしょうか？

私はフランス在住で、ロシアの現在の状況について詳しくは分かりませんが、大多数のロシア人にとっては、北方領土は“ロシアのもの”という意識であるため、クリル諸島に関する問題は、存在しないも同然なのです。ロシア人のごく少数はそれとは違う考え方をしています。リベラルな知識人層や、芸術家層、人権活動家層などは、クリル諸島占領は不法であったため日本に返還すべきだと考えているようです。

—— 撮影するにあたって制限されたことはありましたか？

はい。例えば、北海道から来たビザなし訪問団や国後島に暮らす若者は撮ることができませんでした。彼らはソ連世代ではないから、考え方も違います。

—— 映画の中でインタビューに答えている人たちは、どのように選んだのですか？

まず私は撮影予定地の役所に行き、これから作ろうとしていく映画がどんな映画になるかを思い描きながら、中心的な登場人物になる可能性のある人たちの名前を集めていきました。それから本人たちに会って、それぞれ役割のある6人の登場人物を選びました。映画の中に彼らの名前は出てきませんが、私にとっては彼らが本作の原型であり、相反する考え方を具現化したものです。例えば、登場人物のうちの2人は、国後島で日本

文明の名残を探しながら、放置された日本人墓地を復興しています。役所の人間は彼らのことを、「不愉快な人物で墓荒らし」と表現していましたが、実際に会ってみたらすぐにこの映画がうまくいくとわかりました。

—— 日本人のインタビューも試みましたか？

撮影を行ったのは、2019年の5月から6月上旬にかけてでしたので、日本からのビザなし訪問団はこの時期にはいませんでした。彼らは、7月～9月に島にやってきます。この映画は低予算だったので、もう一度国後に行くことはできませんでした。撮影の間にやって来たのは、札幌にある大学の鳥類学者の一行だけ。彼らが港に到着した様子で、クリル諸島と北海道のあいだを移動する渡り鳥に関する会議の撮影はできましたが、それ以外は撮影許可が下りませんでした。招聘側である国後島の自然保護区事務所が許可しませんでした。すでに、クリル諸島を捉えた映画を2部作にしようと決めています。2作目は、鏡に映すように日本を捉えたものにしたいと思っています。国後島から16キロ離れたところにある根室の町で撮影を行うつもりです。この町は、北方領土返還の中心であると同時に、日本の最東端でもあります。「こんなに近くてこんなに遠い」というのがこの2作目のスローガンです。もうすでに下準備は始めていますが、日本は2020年3月からパンデミックのために入国制限をしていて、私はそれが解除されるのを待っています。根室にはロシア語を話せて、私を手伝ってくれると言う日本人の知人がいるので、登場人物とロケ地を探すつもりです。日本人と共同制作ができればと思っています。

—— 日本の公開に向けて、観客にメッセージをお願いします。

私はこの映画で、現代ロシアという文脈の中で北方領土の問題を調査し、理解しようと試みました。ですから、独立した観点で捉えています。日本の方々が、私の映画を見て不快な思いを抱く方もおられるかもしれませんが。送還の時期について、「日本人は我々の敵であるから、全員退去させられた」というプロパガンダがソ連時代にあり、1947年の出来事から続いている不信任、疑念、そして敵意は、私たちの時代でも感じられるからです。この問題を口に出すことは、不都合な事実なのです。本作には、フィクションの部分は全くなく、全てが時の記憶であり、実在の人物の考えと感情なのです。ロシアの著名な映画批評家であるアンドレイ・ブラホフが本作についてコメルサント紙でこう記しています。「ウラジーミル・コズロフ監督の『Kounachir (仏題)』も、また1つの止まった時間の象徴である。クリル諸島は、1つの国から別の国の手へとわたった領土で、それによって幸せを手にした者は1人もいない。そこには観光も文化的生活も存在しない。そこにあるのは、戦争記念日から見られるしかめっ面だけだ」ソ連時代もそうでしたが、勝者のイメージを植え付けて国民の意識を軍国主義化することに労力を費やし過ぎているのです。本作には、構想中の軍事技術博物館、戦勝記念日のパレード、国後島侵略場面の再現の場面で多くの武器が登場します。映画の中で、所長のオフィスの壁にかかっている時計の針が止まっています。電池が切れかかっている、秒針がビクビクして時が進まない場面が本作を象徴していると思います。



北方領土問題の経緯

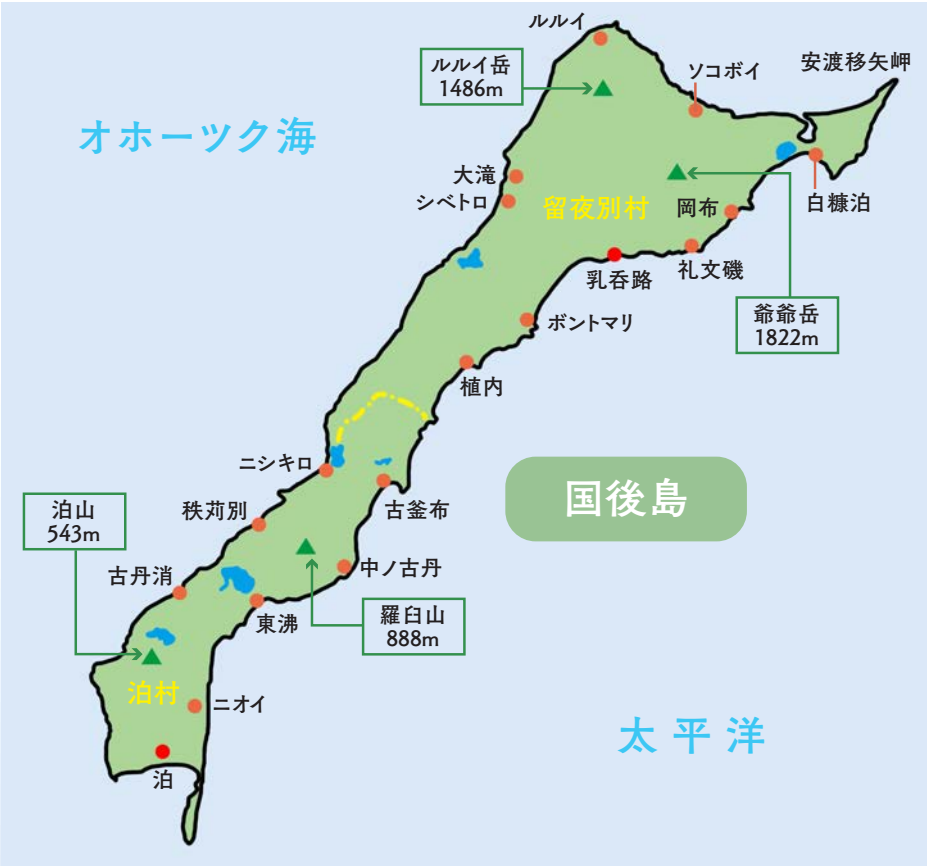
1855	日露通好条約…エトロフ島とウルップ島の間に日露国境線を引き、樺太には境界を定めないこととした。
1875	樺太・千島交換条約…樺太全島をロシア領、ウルップ島以北を日本領とした。千島全島が日本領になった。
1905	9月Ⅵ ポーツマス条約に調印…北緯50度以南の南樺太が日本領となる。
1941	8月Ⅵ 大西洋憲章… 米英両首脳は、第二次世界大戦における連合国側の指導原則ともいべき大西洋憲章に署名し、戦争によって領土の拡張は求めない方針を明らかに。 (ソ連は同年9月にこの憲章へ参加を表明)
1945	2月11日Ⅵ ヤルタ協定… ルーズベルト、チャーチル、スターリンの三国首脳が、ソ連が対日参戦を行った場合の報償を定める。その一つが千島列島のソ連への引き渡しだった。 8月8日Ⅵ ソ連は日ソ中立条約を一方的に破棄し、対日参戦 8月14日Ⅵ 日本はポツダム宣言を受諾 8月18日Ⅵ ソ連軍、千島列島への攻撃を開始 8月28日～9月5日Ⅵ ソ連軍、北方四島を占領 9月2日Ⅵ 東京湾のミズーリ戦艦で、日本が降伏文書に調印
1947	7月Ⅵ 北方四島からの日本人の引揚げ開始(1949年7月に終了)
1951	9月Ⅵ サンフランシスコ平和条約に調印…日本は、千島列島と南樺太(南サハリン)を放棄、ソ連はこの条約に調印していない。
1956	10月Ⅵ 日ソ共同宣言に署名…ソ連は、平和条約締結後に歯舞群島及び色丹島の引き渡しに同意。両国は国交を回復。
1991	4月Ⅵ 日ソ共同声明に署名… ソ連は、北方四島が平和条約において解決されるべき領土問題の対象であることを初めて文書で認める。ソ連側から日本国民と四島住民との間の交流が提案される。
1992	日本国民と四島住民との間の旅券(パスポート)・査証(ビザ)なしによる北方四島交流事業が開始
2013	4月Ⅵ 安倍総理訪露… 戦後67年を経て日露平和条約が 締結されていない状態は異常であるとの認識で一致
2016	12月Ⅵ プーチン大統領の訪日… 北方四島における共同経済活動に関する交渉を進めることで合意
2018	11月Ⅵ シンガポールでの首脳会談… 1956年日ソ共同宣言を基礎として平和条約交渉を加速させることに合意
2019	6月Ⅵ プーチン大統領の訪日… シンガポールにおいて共に表明した決意の下で精力的に平和条約交渉が行われていることを歓迎、引き続き交渉を進めていくことで一致。安倍政権は、通算27回の日露首脳会談を行ったが、領土問題解決には至らなかった。

現在 日露両国間では、北方領土問題の解決に向けた話し合いが続けられている。

参考:「北方領土問題対策協会」素材集、外務省HP (https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hoppo/hoppo_keii.html)



MAP



HISTORY

「ソ連人監督」が見抜く、止まった時間

ロシア在住ジャーナリスト 徳山あすか

日本に住んでいた頃、ビザなし訪問で国後島を訪れたことがある。島での滞在はわずか数時間。事前に決めたプログラムさえも、天候不良や受け入れ側の都合で急に短縮されることがある。基本的に「よそ者」の長期滞在や自由行動は難しい場所だ。

だからこそコズロフ監督が、自らをソビエトの人間と称し、国後島で人間関係を築いて様々な立場の住民から本音を引き出したこと、そして当局どうまくやりながら、フィルムを没収されことなく映画を完成させたことに対して、深い尊敬の念を抱いている。

映画には、地面を掘り起こす男性たちが出てくる。彼らは Cholnaki パーチェリと呼ばれている。直訳すれば「黒い発掘人」だ。黒い、は非合法という意味で、勝手にあちこちを掘って骨董品など日本のものを見つけては、復元して販売したり、コレクションにしたりする。

こういう人は、実はロシア中にいる。この夏、私はタンボフという小都市を訪れた。かつて日本人抑留者が労働させられていたところだ。つい最近、捕虜収容所跡地の周辺から、旧日本軍の認識票が出てきた。掘り出した人は、匿名を条件に私に認識票を託してくれた。公的な調査の行き届かない場所では、Cholnaki パーチェリは、歴史の証人になる可能性がある。

日本人が島から強制退去させられたとき、荷物はほとんど持ち出せなかった。多くの人は、そのうち戻るつもりで、軒下に穴を掘って貴重品を隠した。これまで国後島において、日本人の生活の名残は墓地しかないと思われていた。この映画で国後島における Cholnaki パーチェリの存在が明らかになり、ある意味、彼らの「違法行為」によって、日本人の生活の痕跡がわずかながらも現在まで残ったのは、皮肉なものである。

映画には戦争を直接・間接的に想起させるものが多く出てくる。あるシーンでは、アジア系の男性が日本兵の役を演じ、ソ連軍司令官の求めに応じて、白旗を渡して天皇陛下の名の下に「降伏」を宣言している。もちろん実際にはなかったエピソードだが、予備知識がない状態でこのシーンを見ると、歴史はこうだったと錯覚してしまうだろう。逆に、史実を知っている人を見ると、「歴史を塗り替えようとする試みだ」と怒りたくなるかもしれない。

だが、コズロフ監督の真の意図は、島でこのような、ソ連軍の勝利を強調する脚色された映像が撮られた背景について思いを馳せることにあると思う。また、港のシーンでは、日本が寄贈した鯨の日の丸が、ロシア国旗に塗り替えられていたことが判明する。とは言え、日本がプレゼントしたという事実が変わるわけではない。ふたつのエピソードに共通するのは、塗り替えという行為がとても表面的なものであって、本質を変えるものではないということだ。

日本人からすると国後島を特別な場所だと思うあまり、事あるごとに「これは北方領土だからだ」「日本に対する嫌がらせか」と反応してしまう。しかし、国後島はロシア化して久しく、そこで起こる問題はロシア全体を見渡せばよくあることだ。辺境の国後島では、時間が止まっているが故に、人々のメンタリティを現代的にアップデートする環境がない。「本当は港に戦車を展示したかった」というような、大都会のロシア人ならクスッど笑ってしまうような登場人物の言動も、日本人の目には「挑発」と映るかもしれない。

盛大に見える国後島の軍事パレードも、やれ軍事化だ、愛国主義だと警戒する必要はない。これもロシア全土的なイベントであり、止まった時間の一部だ。こういう例は映画の中のあちこちで見つけることができる。正直、難解な映画だが、描き出される光景を真正面からでなく、ユーモアをもって、背景を洞察しながら鑑賞することで、よりリアルな国後島の姿に近づけるだろう。

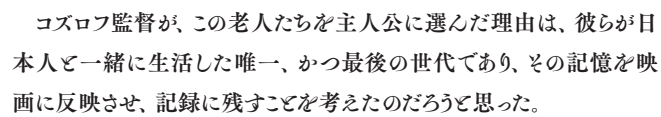
COLUMN





ドキュメンタリーとはいえ、監督が選んだ数人の男女の生活を淡々と撮影しただけで、特にストーリーや主張がある訳ではない。そして、島民の主人公たちは、カメラに向けて、あるいは仲間に向けて、時には独り言で、いろいろ話をする。そのほとんどが、現在の生活への文句であり、つぶやきである。

そして、彼らは、時折、少年・幼年時代に一緒に暮らした日本人のことを思いだす。日本人は、清潔できちんと仕事し、町の規律と秩序を作った。なのに、わがロシア・ソ連政府は、何も作らなかった。すべてが壊れ、ゴミと廃物だらけの島になってしまったと嘆く。その合間に、当時の日本人と町の写真が出てくる。だが、その日本人たちは、非常に貧しく、裕福な生活というよりは、苦しい生活を生き延びたという印象でもある。ちなみに、現在、北方四島には、日本人は住んでいない。映画には、日本人は出てこない。ただ、昔の写真の記憶だけである。



非常に面白い映画だが、ロシア語とロシア人気質が分からないと、何を嘆いているのか理解できず、ユーモアも通じない。その厳しさを知り、考えるのが、映画「クナシリ」の意味なのかもしれない。

COLUMN

